

ビジョン連携推進会議第一分科会 第3回 開催概要

日時	平成 27 年 1 月 20 日(火)
テーマ	大学・学生とのまちづくり
臨時構成員	特定非営利活動法人くにたち富士見台人間環境キーステーション

議事要旨

○ 特定非営利活動法人くにたち富士見台人間環境キーステーションの概要

- ・ 特定非営利活動法人くにたち富士見台人間環境キーステーション（以下、「KF」という。）とは、学生、商店主、市民、行政が連携して、「教育」と「思いやり」をコンセプトに、商店街の空き店舗を活用し、「商店街振興」と「地域づくり」を実践している団体である。
- ・ 国立市富士見台地区は、国立市の中央部にあり、JR中央線国立駅から徒歩 20 分程度、JR南武線谷保駅から徒歩 10 分程度のところに位置している。
昭和 40 年に大規模な公団団地（現「UR都市機構 国立富士見台団地」）として開発されたことから、周辺の商店街は、かつては多くの客で賑わっていた。しかし、団地住民の高齢化に伴い、同地区は市内で最も高齢化率の高い地域となり、街には次第に空き店舗が目立つようになった。
- ・ 国立市では、富士見台 1 丁目周辺地区をモデル地域として選定し、「商工業振興モデル研究事業」を行うこととして、平成 13 年 4 月に「国立プロジェクト研究会」（以下、「研究会」という。）を立ち上げた。研究会には、国立市をはじめ、国立市商工会、富士見台 1 丁目周辺地区商店街、一橋大学等が参加して、同地区商店街の活性化について検討を進めた。
- ・ 同年 9 月には、一橋大学において、研究会と並行する形で大学教授による自主ゼミナールが実施されるようになり、翌平成 14 年度からは、学生の地域活動に単位を与える「まちづくり」という正式な授業が開講された。この授業には 150 名以上が受講し、一部は研究会にも参加した。
- ・ 平成 14 年度、研究会では、学生による提案と商店主による議論をもとに、富士見台第一団地内の空き店舗を活用し、コミュニティカフェとカルチャー教室を開設することを決定した。
- ・ 当初、国立市では、様々な市民団体が出店・店舗運営をし、学生はKFの財務管理などをはじめとする全体的な運営に携わっていくことを想定していたが、学生からの希望もあり、店舗運営についても学生が中心となって担っていくこととなった。
- ・ そこで、当時の学生は、平成 15 年 1 月に、大学の授業とは別に、自発的にこうしたKFの活動に参加できるように学生サークル「Pror-K」を設立した。
- ・ 同年 3 月には、学生、商店主、市民、行政からなる任意団体KFを設立し、平成 18 年 2 月にはKFはNPO法人格を取得している。
- ・ 国立市では、事業開始に当たり、店舗改修時の初期費用の一部（補助金として3分の2）及び店舗の借上料3年分を負担したが、4年目以降は財政支援をしておらず、KFは自立運営を続けている。

○ KFの各事業の概要

- ・ 「Cafe ここのたの」は、平成 15 年 8 月に、「地域の活性化」と「自己実現の場の提供」を目標とするコミュニティカフェとしてオープンした。学生スタッフ、市民スタッフが、接客から調理、メニュー開発を行うほかイベント等も開催し、様々な人と人との交流の場を提供している。

- ・ 「KFまちかどホール」は、平成16年2月にオープンした。カルチャー教室等で活用できるホールを貸出するほか、市民向け講座「まちかど教室」や、研究発表・議論を通じた知の相互交流の場である「まちかどゼミナール」を開催し、学びの場を提供している。
- ・ 「とれたの」は、平成17年11月に、「地産地消」の考え方のもと、地場野菜・地域食材の販売店として、オープンした。学生スタッフ、市民スタッフが、地元野菜の集荷から販売までを行っており、そのほかにも、地元農家が開発したオリジナル商品等の地域食材も販売している。
- ・ 「ゆーから」は、平成24年4月に、手作り品を展示・販売できる市民参加型の雑貨店として、オープンした。「ゆーから」では手作り品のほかにも、国立市リサイクルセンターに集められた家具や市内に放置された自転車をリサイクルした品の販売も行っている。
- ・ こうした空き店舗を活用した取組以外にも、地域イベントへの参加や独自イベントの企画を行っており、盛り上げ役としてご当地ヒーロー「やほレンジャー」が活躍している。ほかにも、商店街の情報を掲載したフリーペーパー「やっほー」や、商店街マップの作成も行っている。

○ KFにおける学生の効果、取組が継続している要因

- ・ KFは、大学・学生と市民との連携が、多くの地域でみられるような計画の策定や単発のイベント開催に終わらずに、学生による自主的な活動によって、学生が入れ替わりながらも、10年以上継続されている点が特長である。その結果、空き店舗の解消、コミュニティ醸成、商店街振興、高齢者対策などの多面的な効果が生まれている。
- ・ 現在、KFの担い手である学生サークル「P r o - K」には一橋大学以外の近隣大学の学生を含む約80名の学生が参加しており、毎年、一定数の学生が新たに加わっている。
- ・ また、サークル内では、上級生が早い段階で下級生へ責任者を譲ることなどで、学生側のノウハウが確実に引き継がれており、活動が継続している一つの要因になっていると思われる。
- ・ 学生は、地域に貢献することで、地域のコミュニティからの感謝を直接感じることができ、それが学生の意欲を引き出すことにつながるため、KFの活動にプラスの効果を及ぼしている。
- ・ KFの取組は、学生の意欲のみならず、店主、市民スタッフの協力の下で、成り立っている事実にも目を向けるべきである。学生が授業を受けている平日は、市民スタッフを中心に店舗運営が行われている。また、店主は、自らの知識経験を活かしつつ、商売に対する姿勢や実現性、採算性の見込み等についてアドバイスを言い、学生の活動をサポートしている。
- ・ 商店会長をはじめとする店主が、商店街の衰退に危機感を持ち、商店街の活性化という長期的な視点に立って意欲的に取り組んでいることが、KFの活動の原動力の一つになっている。

○ 大学・学生との連携に向けて

- ・ 学生が力を発揮するためには、地域が学生を信頼して任せることと、学生が任されることによって責任感を持つような相互の信頼関係の構築が大切である。学生だけでは順調に進まない場合、市民は見守ることを基本にしつつも、時には意思をしっかりと伝えていくことが重要である。
- ・ 学生と地域との連携のためには、地域に学生をサポートする姿勢などの協力が得られることと、少ない人数でも推進役として熱意のある人がいることがポイントになる。
- ・ 行政の役割としては、地域側の受入れに対する姿勢や取組を後押しすることや、意欲のある人材同士を結び付けることなど、コーディネート機能を果たすことが大切である。
- ・ 行政も大学も、二者間だけ連携を完結させるのではなく、地域のコミュニティを巻き込んで、地域に根差した取組をどう進めていくかを考えていくべきである。